

英語語形成における複合と派生の順序について

人文社会科学部文化創生課程多文化共生コース

19H1099 布施姿月

1. はじめに

本稿では、英語語形成における複合と派生の順序の問題を研究対象とし、先行研究や英語母語話者の直観やコーパス及び辞書における記載の有無等に基づき、複合の後に派生が順序付けられるという通常では認められない語形成の過程が存在することを認めなければならないことを指摘し、この語形成の過程に課される条件を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究・問題提起

Allen (1978a, 1978b) は、複合の後に派生が順序付けられるのが基本ではあるが、接頭辞 non-の付与だけは複合の後に順序付けることができることを指摘している。しかしながら、ジーニアス英和辞典第5版(2014)には、接頭辞 non-以外の接辞でも複合語に付与された語が掲載されている。また、接頭辞 non-以外の接辞でも複合語に付与した語で容認できる場合があるという英語母語話者の情報提供から、Allen (1978a, 1978b) の分析は支持し難いといえることができる。Selkirk (1982) は、クラスII接辞¹であれば、複合の後に付与できることを指摘している。これらの分析について、先行研究で用いられた「複合語＋クラスI接辞」「複合語＋クラスII接辞」の語に関して、英語母語話者に判断を仰いだところ、複合語＋クラスI接頭辞の語は全て容認し難いとの判断が示されたが、クラスI接尾辞とクラスII接辞の付与に関しては、容認できる場合と容認できない場合があるとの判断が示された。この結果、クラスI接頭辞を複合の後に付与することは難しいが、クラスI接尾辞とクラスII接辞の複合語への付与の是非に関しては一概に言い切れないことが分かった。荒木(1989)は、複合語が多用され、語根化された語であれば、接辞が付与されることができるとしている。また、大石(1984)は、複合語＋接辞の語をX-Y-Zという連鎖に分析し、複合語への接辞の付与が容認されるには、X-Y、Y-Zという要素の両方が馴染みのある語である必要があると分析している。しかし、これは必要条件であり、十分条件は明確に述べられていない。また、X-Yが再分析されないため、X-Y-Zが容認できない場合もあることを、大石(1984)は指摘している。しかし、英語母語話者の判断によると、彼らの分析の妥当性を示す例もあるが、分析では捉えることができない例も一定数あることが分かった。すなわち、彼らの分析は妥当性に欠けるとまでは言い切れないが、この分析のみでは捉えることができない例があるということになる。

¹ クラスII接辞とは、付与した際に語幹の強勢の位置が変化しない接辞のことであり、付与した際に語幹の強勢の位置が変化する接辞はクラスI接辞と呼ばれている。

3. 分析

本論文では、接辞のクラス I・II に対して、条件 (1) と (2) を仮定し、更に、条件 (3) をも満たすとき、複合の後に派生が順序付けられることが容認されるという仮説に基づく分析を提案する。

(1) 付与するのがクラス II 接辞の場合

語幹となる複合語は多用されて馴染みのある語となり、語根化されている

(2) 付与するのがクラス I 接尾辞の場合

「複合語+クラス I 接尾辞」という語を「X-Y-Z」であるとして、「X-Y」「Y-Z」という要素の両方が馴染みのある語である

(3) ①それぞれの接辞が持つ、どのような意味合いの語に付与するか等の特徴に合った語が語幹となっている

②その単語の意味を表すのにより適した語が他にない

馴染みのある語であるという基準は、コーパス (BNC web) に掲載があることとし、接辞が持つ特徴に関しては、西川 (2006) と英和辞典を参照した。また、より適する語が他にないという基準は、コーパスや英和辞典や Google Ngram Viewer² のいずれにも掲載がなく、かつ似た意味合いの語がこの 3 つのいずれかに掲載があることとする。

まず、複合語+クラス II 接頭辞の語に関する分析を以下に示す。

(4) a. 接頭辞 non- : non-waterproof b. 接頭辞 un- : un-self-confident

(4a) については、語幹 (waterproof) はコーパスに 411 個掲載があった。また、(4a) を「防水ではない」という意味で使用した文が Google Books 内で見られた。さらに、防水か否かに関して中間状態はあり得ない。これは、接頭辞 non-の「名詞、形容詞に付与し、基体の反対概念を表す。基体を X とし、X と non-X の間に段階の概念は入らない (西川 2006: 95-96)」という特徴に合っている。よって、本稿の分析の仮説の条件を満たす。(4b) については、語幹 (self-confident) はコーパスに 94 個掲載があった。また、(4b) を「自信のない」という意味で使用した文が Google Books 内で見られた。また、語幹について、自信があるという状態には程度の幅があり、好ましい状況であると考えられる。これは接頭辞 un-の「形容詞、名詞、動詞に付与し、否定、反対、逆の意味を表す。また、好ましからざる意味を持つ形容詞には付与しにくい (西川 2006: 141-142)」「un-を伴う形容詞・副詞は通例 very, rather などに修飾される (ジーニアス英和辞典第 5 版 (2014))」という特徴に合っている。よって、本稿の分析の仮説の条件を満たす。

次に、複合語+クラス II 接尾辞の語に関する分析を以下に示す。

(5) a. 接尾辞-ly : housewifely b. 接尾辞-ship : sportsmanship

(5a) については、語幹 (housewife) はコーパスに 633 個載っていた。また、(5a) を「主婦のような」という意味で使用した例文がコーパスで見られたことから、接尾辞-ly の「基体の名詞を形容詞にする。『~のような』『~らしい』の意 (西川 2006: 259)」という特徴に合っていて、本稿の分析の仮説の条件を満たす。(5b) については、語幹 (sportsman)

² Google Ngram Viewer とは、Google Books 内に登録されている書籍の中で使用されている単語の使用頻度を調べるためのツールのことである。

はコーパスに 201 個載っていた。また、(5b) を「スポーツマン精神」という意味で使用した例文がコーパスで見られたことから、接尾辞-ship の「名詞に付与し、基体の性質、制度、精神を表す (西川 2006: 219)」という特徴に合っていて、本稿の分析の仮説の条件を満たす。

続いて、複合語+クラス I 接尾辞の語に関する分析は、以下の通りである。

(6) a. 接尾辞-al : folk musical b. 接尾辞-ian : rock musician

(6a) について、X-Y (folk music) と Y-Z (musical) はコーパスにそれぞれ 56 個、3001 個掲載が見られた。また、(6a) を「民族音楽の」という意味で使用した文が Google Books 内で見られたことから、接尾辞-al の「基体の名詞に付与し、ある状態を表す形容詞をつくる (西川 2006: 236-237)」という特徴にも合っており、仮説の条件を満たす。(6b) について、X-Y (rock music) と Y-Z (musician) はコーパスにそれぞれ 106 個、618 個載っていた。また、(6b) を「ロック音楽のミュージシャン」という意味で使用した文がコーパスで見られたことから、接尾辞-ian の「基体の名詞に付与し、人を表す名詞をつくる (西川 2006: 185)」という特徴に合っていて、本稿の分析の仮説の条件を満たす。

最後に、先行研究では容認可能として扱われていたが、英語母語話者は容認不可能とした語に関する分析を、以下に示す。

(7) a. *un-light-sensitive, *un-germ-resistant, *un-factory-built
b. *un-bloodthirsty, *un-downtrodden, *un-top-heavy

(7a) と (7b) はそれぞれ、接頭辞 un- の「un-を伴う形容詞・副詞は通例 very, rather などに修飾される」「好ましからざる意味合いの語には付与しにくい」という特徴に合っていないために、容認されないとの判断が示されたと考える。

4. 考察

本稿では「複合語+クラス I 接頭辞」は容認し難いと分析する。その理由について、大石 (1984) の提示した X-Y-Z の条件が、複合語+クラス I 接頭辞の場合、X-Y が存在しにくいために、条件を満たすことが難しいためではないかと考える。また、複合語+クラス II 接頭辞でも X-Y が存在しにくい場合があるが、大石 (1984) では、un-self-sufficient という複合語+クラス II 接頭辞の語が論文内に掲載されていたことから、そもそも複合語+クラス II 接頭辞の語が容認されないとは思っていないと考える。

また、あくまでも傾向に過ぎないが、複合語+クラス I 接尾辞の語は、X-Y、Y-Z のそれぞれの語の意味が X-Y-Z の語の意味と関連がある場合が容認されやすいと考える。

(8) 容認可能

wind instrumental (「管楽器の」と解釈可)

→wind instrument (管[吹奏]楽器) +instrumental (楽器で演奏される)

(9) 容認不可能

witch doctoral (「呪術医の」と解釈可)

→witch doctor ((特にアフリカの) 呪術医) +doctoral (博士(号)の ×医師の)

Kipersky (1982) は、これらの語は混成の一種であり、存在する 2 つの語を組み合わせ形成されたとしている。また、大石 (1988) は、Quirk, et al. (1985) は混成によって形成

された語は前半部分が後半部分を修飾する関係にあることを指摘していると述べている。

(9) が容認不可能なのは、語の前半部分と後半部分に修飾する関係がないためであると考ええる。

より適した語が他にないために容認不可能になった語には、*un-light-sensitive, *non-overripe 等がある。これらは non-light-sensitive, ripe という単語を使用する方が良いという英語母語話者の判断が得られた。故に、既存の単語の存在により新語の形成が阻まれる阻止という現象により、これらの語が容認されないと考える。

5. おわりに

本稿では、複合の後に派生が順序付けられる語形成の過程で形成された語が容認可能であると認められるのは、接辞のクラスや、複合語が非派生語に近いという条件やそれぞれの接辞の特徴に合った語幹であることや他により適する表現がないという条件を満たすことが必要であることを明らかにした。

主要参考文献

- Allen, Margaret. (1978a) *Morphological Investigations*. Doctoral Dissertation, University of Connecticut.
- Allen, Margaret. (1978b) "The Morphology of Negative Prefixes in English." *North Eastern Linguistic Society (NELS)* 8, 1-11.
- 荒木一雄 (1989) 「オーダリング・パラドックスについて」『研究論集』(相愛大学 相愛学園創立百周年記念号) 第 5 巻 83-97.
- Kiparsky, Paul. (1982) "Word-Formation and the Lexicon." *Paper of the Mid-America Linguistics Conference*, University of Kansas, 3-29.
- 西川盛雄 (2006) 『英語接辞研究』開拓社.
- 大石強 (1984) 「語構造の再分析について」『文経論叢』(弘前大学人文学部) 第 19 巻 第 3 号 85-97.
- 大石強 (1988) 『形態論』開拓社.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sidney, Leech, Geoffrey, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Selkirk, O. Elisabeth. (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

コーパス及び辞書

BNCweb (CQP-Edition)

<http://bncweb.lancs.ac.uk/cgi-bin/bncXML/BNCquery.pl?theQuery=search&urlTest=yes>
(最終閲覧日: 2023 年 1 月 5 日)

Google Books <https://books.google.co.jp/google> (最終閲覧日: 2023 年 1 月 5 日)

Google Ngram Viewer (Google Books) <https://books.google.com/ngrams/> (最終閲覧日: 2023 年 1 月 5 日)

南出康世 [編集主幹] 2014 『ジーニアス英和辞典第 5 版』大修館書店